様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２５日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７～２００９
課題番号：１９５２０００３
研究課題名（和文）　ギリシア人の人間観への医学思想の影響をめぐる思想文化史的研究

研究課題名（英文）　A Philosophical Study of Greek Medicine and its Impact on the Formation and Development of Greek Anthropology

研究代表者
今井　正浩（IMAI MASAHIRO）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：８０２８１９１３

研究成果の概要（和文）：本研究の主眼は，古典期ギリシアの医学思想が同時代のギリシア人の人間観の展開に対して与えた影響を，思想文化史的観点に立って解明することにあった．この時代の医学者たちによる重要な思想的貢献の一つは，いわば価値中立的な生理学的事象として人間の身体（ソーマ）というものを，明確に概念化したという点にある．身体の明確な概念化によって，倫理的・社会的存在としての人間の主体性のよりどころにあたるものが，理論的に要請されることになり，この要請が人間の「魂」（プシューケー）の〔再〕発見へとつながっていったと考えられる．

研究成果の概要（英文）：The purpose of my research was focused on Greek medical thought in the Classical period and its impact on the formation and development of the contemporary Greek anthropology. The Hippocratic doctors defined the human body (*soma*) as what constitutes the physical aspect of human being, neutral as it is generally held today in ethical evaluation as well as in social distinction. This definition might well have led further to the rediscovery of human soul (*psyche*) as the internal self, which constitutes essentially the ethical and social aspect of human being.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学　哲学・倫理学
キーワード：ギリシア人の人間観　ギリシア医学　ヒポクラテス医学文書　自然（ピュシス）身体（ソーマ）　魂（プシューケー）

１．研究開始当初の背景
本研究は，平成１６年度～平成１８年度の科学研究費補助金採択課題「ギリシア語医学思想と人間―同時代の哲学的人間観との比

較研究」にもとづく研究の成果として明らかとなった諸点を研究の出発点としつつ，古典期ギリシアの医学者たちの人間理解の特質を同時代の哲学的人間観と比較することをとおして解明するという方向から，この時期の医学思想がギリシア人の人間観の展開に対して与えた影響を思想文化史的な観点に立って明らかにするという方向へと，大きく展開させたものである．

ギリシア医学は，初期ギリシア哲学者たちから合理的な思考法や合理的な説明の方式を受けつぐことによって成立し，経験科学として発展していったとされている．しかし，ヒポクラテス医学文書におさめられているこの時期の医学書の中には，医学と哲学との関係が深甚であったということを示唆する医学書が存在する一方，医学を哲学から自立した学問として位置づけ，両者の間に明確な領域化をはかるという方向に論を展開している医学書が存在するのである．

私は，医学を同時代の哲学によって理論的に基礎づけるという傾向に対して，批判的な立場に立って論を展開している医学書に着目し，その論述内容の分析をとおして，医学者たちによる哲学批判の主要な論点を明確にし，その背景にどのような問題関心が存在しているのかを明らかにしようとした．

以上の考察の結果として明らかになったのは，つぎの諸点である．

（１）医学者たちの哲学批判は，人間というものを原理的に理解し，説明するための概念的な枠組みが，同時代の哲学者たちの場合と異なっているという点に端を発している．

（２）哲学者たちが人間の「自然」（ピュシス），すなわち，人間の本質にあたるものを「生成したもの」としてとらえ，このような「自然」概念にもとづく人間のあり方や働きを，生成の始まり（アルケー）としての基本元素に帰属するものとみなした．これに対して，医学者たちは，人間の身体（ソーマ）のあり方や働きを，身体の構成要素にあたると「体液」の量と作用力にもとづいて，原理的に説明するためのものとして「自然」という概念を用いている．

このように，「自然」が人間の身体に特化した概念として提示されているのは，身体が「体液」の量および作用力に起因する事象（たとえば，疾病）が生起する場として，領域化されているということを意味する．以上のことは，医学と同時代の哲学との間の影響関係という問題をこえて，ギリシア人の人間観の展開全体について考察する場合に，重要な示唆を含んでいるのではないか．すなわち，医学者たちの人間理解の中に，いわば「身体の発見」というべき出来事を，重要な思想史上の事実として確認することができるように思われるからである．

２．研究の目的

以上のような見通しのもと，本研究では，哲学も含めた思想文化史的文脈へと考察の範囲を広げることによって，古典期ギリシアの医学者たちの人間についての基本的理解を，ギリシア人の人間観の展開の中に明確に位置づけることによって，その特質と意義を明らかにしていくことを目標として立てたのである．

ギリシア人の伝統的な人間理解の特質について考える上で，もっとも重要な手がかりを与えているのは，ホメロスの人間観である．ホメロスの人間観においては，「魂」（プシューケー）という概念が，ソクラテス以降の哲学的な文脈において顕著にみられるような，倫理的・社会的存在としての人間の主体性のよりどころという明確に規定を与えられていない．むしろ，ホメロスの人間観においては，私たち自身が人間の身体として理解しているところのものに，各人の倫理的・社会的存在としての自己規定の根拠にあたるものとしての役割が与えられている．以上のことは，疾病がたんなる身体の不調という事象をこえて，人間の不正や非道に対する神々からの警告ないし報復という倫理的メッセージを含むものとして描かれているという事実からも裏づけられる．

従来の研究史においては，ホメロスの人間観を出発点とする伝統的な人間理解の方式から，ソクラテス以降の哲学的文脈において顕著となるような「魂」中心の人間理解へといたる，ギリシア人の人間観の展開を，おもに「魂」という語の概念史的展開をたどるということに重点をおいて，議論が展開されてきた．けれども，ホメロスからソクラテスにいたる「魂」（プシューケー）という語の意味を，時代ごとの用例に照らして確定するという作業は，つねに資料上の制約をともなうし，考察の焦点を特定の語（＝「魂」）の意味の変遷という限定的な文脈にあてているために，単眼視的になりがちであった．

本研究では，それまでの研究史を補完するという意図のもとに，人間の身体（ソーマ）の明確な概念化という出来事を，ソクラテス以降の哲学的文脈において顕在化していく「魂」中心の人間観の成立と関連づけることによって，この問題の解明にむけて，新たな解釈の視座を提供することが目的であった．すなわち，本研究は，倫理的・社会的存在にあたる人間の自己規定のよりどころとして，古くから機能していたものが，身体という生理学的事象へと転換させられたことで，そのような存在としての人間の主体性の根拠にあたるものが新たに要請され，以上の要請にもとづいて「魂」というものが再認識されることになったのではないかという見通しに立って着手されたのである．

３．研究の方法

以上のような見通しのもと，（１）本研究の第一段階として，ギリシア人の伝統的な人間観の原型を提供していると考えられるホメロス，ヘシオドス，初期の抒情詩人たちや悲劇詩人たちの作品の分析をとおして，おもにつぎにあげる諸点に重点をおきながら，そのような人間観と，その基本的な特長を明らかにするための作業に着手した．

①疾病が個人ないし共同体全体に対する神々からの「倫理的メッセージ」にあたるという考え方の背景には，どのような原因論の文脈が存在していたのか．

②「生まれ」（ピュシス）という概念は，共同体全体，ないしその成員にあたる個人の存在論的身分のよりどころにあたるものとして，どのように機能していたのか．

③いわゆる「けがれ」（ミアズマ）と「浄化」（カタルシス）　という諸概念は，共同体全体，ないしその成員にあたる個人の自己理解のあり方をどのように規定していたのか．

（２）本研究の第二段階においては，前５世紀の医学思想における身体（ソーマ）という概念の成立とその思想的背景について，ヒポクラテス医学文書におさめられている，いくつかの医学書の論述内容の分析をとおして，以下の諸点に着目しながら，考察をすすめた．

①医学者たちは，疾病という現象を外的諸要因の影響によって，物理的に引きおこされる身体の不調として位置づけた．そこには，疾病に「倫理的メッセージ」としての役割をになわせるという伝統的な「疾病」観からの決定的な転換があったと考えられる．

②医学者たちは，疾病の診断治療の場合に，患者の身体というものを，価値中立的な観察の対象にあたるものとして位置づけた．

③医学者たちの平等主義的な人間理解に立った場合，すべての人間は「有徳」であるなしを問わず，医学者の治療の対象としての「患者」という点においては，均質化されることになる．この立場を理論的に根拠づけていたのは，価値中立的な対象としての身体という考え方であったと思われる．

（３）本研究の第三段階においては，人間の「魂」（プシューケー）というものを，人間の身体の対概念として，明確に位置づけている医学書の議論を手がかりとして，倫理的・社会的存在としての人間の，主体性のよりどころとして「魂」が再認識されていくプロセスの一端を明らかにした．

①ヒポクラテス『環境医学論』第２部における，身体と対置された「魂」という語の最初期の用例をめぐって

②『体液論』第９章における身体と「魂」の相関性をめぐる議論をめぐって

本論考は，このような手順・方法にもとづいて，段階的にすすめられたのである．

４．研究成果

以上の方法・手順にもとづく研究の結果として明らかになったことを整理すると，以下のようになる．

古典期ギリシアの医学者たちの人間理解を端的に特長づけているのは，身体の「自然」（ピュシス）という概念である．「自然」という語は，伝統的なギリシア社会においては，共同体の成員としての特定個人ないし集団の存在論的根拠にあたるもの（「生まれ」）を意味し，これらの個人や集団をほかから区別するための，いわば差異化の原理として強力に機能していた．これに対して，医学者たちは「自然」を身体に特化した概念として再規定したのである．以上のことは，つぎのような重要な意味を含んでいた．

（１）ヒポクラテスの属していたコス医学派系の主要な医学書『人間本性論』の著者は，人間の身体の「自然」をいわゆる「四体液」の性質とは働きにもとづいて説明している．「四体液」というのは，人間の身体の原理的構成要素にあたるものであるから，身体の「自然」という視点に立った場合，すべての人間は個人差を含みながら，その本質的な面においては同等であるということになる．

（２）この「自然」は人間の身体というものを，さまざまな生理的事象がいわゆる物理的な因果法則にもとづいて生起する場として領域化している．『人間本性論』の著者は，すべての疾病を「四体液」相互のバランスのくずれに起因するものとみなしている．以上のような原因説明の方式は，疾病に「倫理的コード」としての役割をになわせてきた伝統的な「疾病」観を相対化していくとともに，価値中立的な生理学的対象としての身体というものの基本性格を規定していった．

「身体の発見」という重要な思想史上の出来事については，このように説明することができる．これに対して，倫理的・社会的存在としての人間の主体性の根拠としての「魂」の再発見は，ギリシア人の伝統的人間観を形成していた「自然」が，このように，身体の「自然」へといわば回収されていったことを主要な要因の一つとしているとみることができる．事実，そのような意味における「魂」の固有性についての認識は「身体の発見」という出来事にかかわった医学者たち自身の問題関心の中に見出すことができる．コス医学派系の主要な医学書の一つ『環境医学論』第Ⅱ部の議論においては，気候風土などの自然環境とは別に，社会環境（「ノモス」）が，人間の「魂」に帰属する諸性質（性格等）の形成因にあたるものとして重要な位置づけを与えられている．

本研究では，以上の研究成果を，西洋古代哲学・思想史研究に寄与しうる，新たな知見として提示した．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
① 今井正浩　（単著）
「ヒッポクラテス『技術論』と医学の存在根拠をめぐる論争」
『言語とコミュニケーション―その文化と思想―』（査読無）第Ⅱ号
２０１０年　pp.29-70.
② 今井正浩　（単著）
「身体の発見史―身体概念の成立をとおしてみたギリシア的人間観の展開をめぐる一考察―」
『セミナー医療と社会』（査読有）第３５号　２００９年　pp.5-22.
③ 今井正浩　（単著）
「ギリシアの医学思想における発生の問題―『生殖について』第６章～第８章の議論の分析を中心に―」
『西洋古典学研究』（査読有）第５７号
２００９年　pp.41-52.
④ 今井正浩　（単著）
「ギリシアの医学思想における「パンゲネシス」の系譜」
『科学史研究』（査読有）第４８巻（No.249）
２００９年　pp.22-33.
⑤ 今井正浩　（単著）
「自然・経験・ロゴス―経験科学としての医学とその成立背景をめぐる言語文化史的考察―」
『言語とコミュニケーション―その文化と思想―』（査読無）第Ⅰ号
２００８年　pp.17-49.
⑥ 今井正浩　（単著）
「ヒポクラテス『伝統医学論』第２０章における反哲学的人間観―前５世紀ギリシアの医学思想における人間理解をめぐって―」
『科学史研究』（査読有）第４６巻（No.242）
２００７年　pp.78-90.

〔学会発表〕（計４件）
① IMAI Masahiro
‘The Hippocratic Tradition in Early Alexandrian Medicine’
The Research Seminars in the School of Humanities and Social Sciences
December 4th, 2008
University of Exeter, UK.
② 今井正浩　（単著）
「ギリシアの医学思想における発生の問題―『生殖について』第６章～第８章の議論の分析を中心に―」
日本西洋古典学会　第５９回大会
２００８年６月７日・８日
同志社大学
③ 今井正浩　（単著）
「ギリシアの医学思想における汎生説（パンゲネシス）の系譜（II）
日本科学史学会　第５５回年会・総会
２００８年５月２４日・２５日
電気通信大学
④ 今井正浩　（単著）
「ギリシアの医学思想における汎生説（パンゲネシス）の系譜」
２００７年５月２６日・２７日
京都産業大学

〔図書〕（計１件）
① 今井正浩　（共著）
中央公論新社刊　内山勝利責任編集『哲学の歴史』第２巻　pp.316-349, pp.625-630.
「Ⅴ．ヘレニズムの科学思想　３．アレクサンドリアとローマの医学」
２００７年

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
今井　正浩（IMAI MASAHIRO）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：８０２８１９１３

(2)研究分担者

研究者番号：

(3)連携研究者

研究者番号：